

Title	自分の生き方に自信のない母親：規定要因と考察
Sub Title	Why moms are not confident in their lives : the determinants and considerations
Author	植村, 理(Uemura, Aya)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2017
Jtitle	Keio SFC journal Vol.16, No.2 (2016. ) ,p.110- 138
JaLC DOI	10.14991/003.00160002-0110
Abstract	国際比較が可能な調査において、日本の学齢期の子どもの自尊心の低さが顕著であることはよく知られているが、その一部がその子の母親自身の自己認識に影響を受けているとの見方が強い。このことから、本稿では、小学生の子どもを持つ母親に対するアンケート調査の個票を用いて、母親が自分の生き方に対して「自信」を持っているかどうか、どのような社会的・経済的要因によって規定されているのかを実証的に明らかにすることを試みた。分析の結果、社会・経済的な環境を制御した後でも、母親自身の将来展望に代表されるような母親自身の社会関係資本が母親の「自信」に影響していることが明らかになった。
Notes	自由論題 研究論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1602-0110">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1602-0110</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

[研究論文]

# 自分の生き方に自信のない母親 規定要因と考察

## Why Moms Are Not Confident in Their Lives The Determinants and Considerations

植村 理

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程

Aya Uemura

Doctoral Program, Graduate School of Media and Governance, Keio University

**Abstract:** 国際比較が可能な調査において、日本の学齢期の子ども自尊心の低さが顕著であることはよく知られているが、その一部がその子の母親自身の自己認識に影響を受けているとの見方が強い。このことから、本稿では、小学生の子どもを持つ母親に対するアンケート調査の個票を用いて、母親が自分の生き方に対して「自信」を持っているかどうか、どのような社会的・経済的要因によって規定されているのかを実証的に明らかにすることを試みた。分析の結果、社会・経済的な環境を制御した後でも、母親自身の将来展望に代表されるような母親自身の社会関係資本が母親の「自信」に影響していることが明らかになった。

This research paper focuses on mothers' self-confidence in Japan, and examines the psychological and social impact factors. Many international studies have testified that young Japanese people show lower self-confidence, self-image, and motivations. However, the solution to build self-confidence is not clear. This paper aims at highlighting mothers' self-confidence as an important family environment for children's well-being, learning and intellectual development. Applying statistics, this paper illuminates factors and implications that affect mothers' self-confidence. The positive prospects of their own future, and the satisfaction with their own current friends' relationship impact on their self-confidence.

**Keywords:** 自己肯定感、自尊心、母親、ソーシャル・キャピタル  
affirmation, self-esteem/self-confidence, mother, social capital

## 1 はじめに

### 1.1 問題の背景

PISA、TIMSS のような国際比較調査<sup>[1]</sup>において、繰り返し指摘されているのが、日本の学齢期の子どもたちは海外と比較して特に「自尊心が低い」ということである。周知のとおり、多くの国際比較調査において、日本の子どもたちの学力は、過去 10 年以上にわたって、上位に位置している。それにもかかわらず、日本の子どもたちの「自尊心」や「自己肯定感」は、一貫して参加国平均を下回り、調査年によっては先進国中、最下位に位置することすらある。

特に、文化的にも似ているアジア諸国の学力が高い国々の中で、自尊心が国際平均より低いのは日本と韓国のみであるなど (OECD, 2012)、日本人の若者の自尊心の低さが際立っていることを裏付けるデータは多い。例えば、日本を含む 7 カ国において、満 13 歳から満 29 歳までの男女の自己意識を調査した「子ども若者白書」(内閣府)によると、日本の若者の「自尊心」は著しく低い。同調査では、自分自身に満足している者の割合は 5 割弱、自分には長所があると思っている者の割合は 7 割弱で、いずれも諸外国と比べて著しく低く、「やる気のなさ」「意欲のなさ」など否定的な心の状態なども含め、日本の若者の自己認識の低さが示され、課題があることを指摘している (内閣府, 2013)。日本の子ども・若者の「自尊心の低さ」の広範な影響が懸念される<sup>[2]</sup>。(図 1)

日本においては、認知能力である学力指標に対する関心が高く、非認知能力である自尊心の低さについての注目度は低い。しかし、Campbell (1976) では、意義がある幸福で健康な生活を送っているという自己認識の 3 つの基盤の 1 つとして「自尊心」が位置づけられ、Mecca (1989) では、自尊心の健全な育成は、いわば教育の基本的な目的として定着している。また近年の経済学の研究蓄積では、学力や IQ などで計測される「認知能力」よりも、自尊心に代表されるような「非認知能力」の重要性が強調されている (Heckman et al., 2006)。日本においても、第 2 章で詳述する非認知能力の重要性を示唆する研究が出てきており、今後 21 世紀の不確実性の高い時代を生きる人材を育てるためにも、自尊心を含む子どもたちの非認知能力をどのように育成するかということが課題となってくることは疑いの余地がない。

そのような中で、本稿では、子どもの自尊心の育成にあたり、ソーシャル・

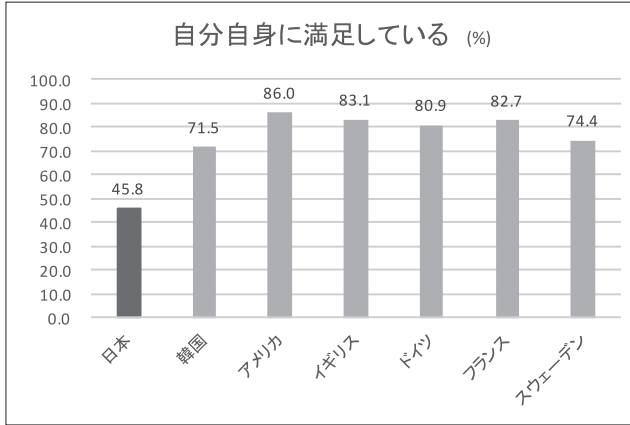


図1 自分自身への満足度

出所：平成26年版子ども若者白書（内閣府，2014）

キャピタル (Social capital; 社会関係資本) という、教育だけではなく社会学などの広範な分野で用いられる概念に基づき、「自尊心の低さ」に対して、子どもの成育環境、その中でも特に多くの時間を一緒に過ごす母親、その母親自身の自尊心に着目する。先進国の中で、日本の母親の置かれている状況は大変厳しい。世界銀行の「ジェンダーギャップレポート」によると、男性と比較した時の女性の地位は、参加145カ国中、日本は101位 (World Economic Forum, 2015) と底辺に位置している。アジアでは、中国(91位)やシンガポール(54位)などよりも低い(図2)<sup>[3][4][5]</sup>。

本稿の新規性を述べる。まず第1に、子ども・若者の低い自尊心という課題に関して、ソーシャル・キャピタルとしての母親、その自身に対する自己認識である「自分の生き方への自信」に焦点を当てたことである。これまで、日本においては、乳幼児期における母親のメンタルヘルスの重要性(菅原, 1997)など、母親の精神状態が子どもの成育環境として重要だという研究はあるものの、子どもの自尊心育成に影響を与えるとみられる、小学生の母親の自己認識を焦点化した研究はない。母子間の自尊心についての価値観の伝達を含む因果関係については、母子両方の情報を含むデータが必要となるため、本稿では直接的な分析を行わないものの、その蓋然性が高いことを示すいくつかの先行研究を

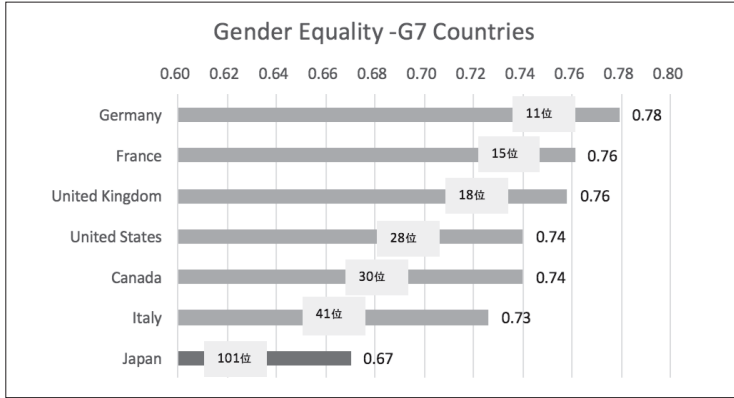


図2 Gender Equality の国際比較

出所：World Economic Forum “The Global Gender Gap Report 2015” より抜粋

第2章で紹介する。第2に、理論的枠組みだけではなく、母親自身の自己認識を象徴する自分の生き方に対する「自信」の決定要因を、アンケート調査の個票データを用いて明らかにしたことにある。具体的には、母親の何に対する満足が、どの程度「自分の生き方への自信」に寄与しているのかを、時間軸、役割別に捉え、構成要因としての強さを示し、どの満足要因がどの自信段階においてどの程度効果があるのかを、属性（社会経済的要因）も考慮しつつ定量的に検討する。以上2点を総括し、政策的なインプリケーションとしてまとめる。

本稿での「自尊心」の定義は、Leary (2000) の self-esteem の定義に倣い、「人が、全体的にその人自身に価値を感じているか、その判断と自身に対する態度、自身についての肯定的なイメージとプライドや恥などの精神的な状況についての回答から判断できる総合的な概念」とする。本稿では、自尊心 (self-esteem, self-confidence)、自己肯定感 (affirmation) など自己に対する肯定的な自己認識を象徴する項目として、「自分の生き方への自信」をとらえた。

本稿の構成は、次のようなものである。第2章で国内外の先行研究を概観した後、定量的な分析を行う。第3章では、母親の「自分の生き方への自信」に焦点を当て、分析に使用する「モノグラフ小学生ナウ 小学生の親子関係—母親調査から—, 2000」(ベネッセ教育総合研究所) のデータの概説をする。合わせて、二次分析に向けた前提条件を整理する。第4章では、統計的な分析

の問いの設定、母親の「自信」の構成要因分析を行う。第5章で分析の解釈として、被説明変数である「自信」の段階別、説明変数、属性別の影響の大きさなどを、社会経済的要因を加味し検討する。最後に、第6章で論文の理論的枠組、データ分析の結果をまとめ、政策的含意と今後の課題を述べる。

## 2 先行研究

### 2.1 「自尊心」の重要性

欧米では、前述したとおり、意義がある幸福で健康な生活を送っているという自己認識 (SWB : Subjective well-being) の3つの基盤として「自尊心 (自信)」が位置づけられ (Campbell, 1976)、その役割や重要性を分析した研究が多くある (Greenwald, 1995; Leary and Baumeister, 2000 他)。特に、最近の社会経済的に不利な状況にある生徒に関する研究で、自尊心のある子ほど、不利な状況を克服し、高い学力を獲得する確率は高くなることが明らかになっている (OECD, 2010; OECD, 2011)。また、職業生活における成功には、適切なレベルの自尊心が重要であると指摘もある (Heckman, 2006)。これらを踏まえ、欧米では「自尊心」の健全な育成は、いわば教育の基本的な目的として定着している。それに対し、日本においては、認知能力の「学力」に重きが置かれ、非認知能力としての「自尊心」にはそれほど重点が置かれていなかった。しかし、国際比較調査では繰り返し、日本の子どもたちの自尊心や意欲の低さといった非認知能力への課題提起がされている (IEA, 2011; PISA, 2012)。日本においては、大学や高校の選抜試験が競争的なこともあって、自尊心のような非認知能力よりもむしろ、学力やIQなどで数値化が容易な認知能力に注目が集まる傾向があった。しかし、日本のデータを用いた研究でも非認知能力が学歴・就業・昇進などに与える影響が少なくないことを示した研究は存在し (Lee and Ohtake, 2014; 戸田他, 2014)、今後、非認知能力の重要性、その健全な育成についての研究がさらに進んでいくと考える。

### 2.2 ソーシャル・キャピタルとしての母親

本稿では、ソーシャル・キャピタル (Social capital; 社会関係資本) という、教育だけではなく社会学などの広範な分野で用いられる概念に基づき、子

---

も、若者の「自尊心の低さ」に対して、子どもの成育環境に着目した。Coleman (1988)では、家族を最も重要な社会関係資本の構成要素と説明し、財的資本、人的資本に加え、家族内の結束や親子の相互関係や子どもへの親の観察力といった社会関係資本を家族の社会関係資本の3つの要素とした。近年、日本でも財的資本(例えば世帯収入)や人的資本(親の学歴など)といった家庭の社会経済的地位の差異についての議論が行われている。しかし、子どもの健やかな成長に影響があるからといって、親の学歴や収入を政策によって変えることは難しい。本稿では、家族に関わる社会関係資本の中でも、比較的政策によって課題解決の可能性のある要因として、母親の心理的ステータス、その母親自身の Well-being の基盤としての「自尊心(自信)」に着目する。

### 2.3 母親の自己意識の子どもへの影響

本稿では子どもの自己認識の低さは、母親、特に児童期の母親の影響を受けているのではないかとの視座に立つ。親子双方のデータをマッチングできる形での先行研究として、小・中学生各500名の親子の自己認識を調査した「第2回青少年の生活と意識に関する基本調査報告書」を紹介する。この調査によると、表1のように、父子間には全く認められない自己認識の類似性が、母子間には見られることがわかっている。しかも、中学生よりも小学生とその母親の自己認識の相関が強いことも明らかになっている。(大山, 2001)

表1 「自分の性格」の類似性

	N=	父-子 小中	父-子 小学生	父-子 中学生	母-子 小中	母-子 小学生	母-子 中学生
一人の方が好き	300				**	**	
相談できる人がいる	1056				***	*	**
何をしようと自由	313				***	**	**
社会を変えていける	104						
豊かな生活を送りたい	402				*		
自信を持ってやれない	150					*	
一人で生きていけない	347				**	**	

\*\*\*有意水準0.1% \*\*有意水準1% \*有意水準5%

出所：大山七穂「親子関係と親の影響力」第2回青少年の生活と意識に関する基本調査報告書(内閣府)

加えて、東京大学社会科学研究所による高校生とその母親 603 名の進路意識に関する調査を活用した複数の研究において、母子間の類似性、価値観の伝承性が明らかにされている。中澤 (2014) は、母親の高学歴志向性が子どもの進学意識と一致しており、その影響具合は、小・中学生時代の母子のコミュニケーション頻度が寄与しているとしている。また、小川 (2014) は、職業志向性が母親から子どもに継承されることを明らかにしている。特に「男は仕事、女は家事」というような「性別役割分業意識」については、男子の場合は母親の価値観が一般的価値観として伝統性が継承され、女子の場合は一般的価値観への伝承性は男子ほど強くないものの、自身の個人的な進路選択の選考において継承が認められるとしている。これらの研究でも、子どもの価値観に与える母親の強い影響が示唆されている。「自尊心」に関しては性別役割分業意識や進学志向などのさらに深い土台であり、無意識のレベルで、高校生より前の時期に母子間で何らかの継承があると推測できる。

## 2.4 日本における母親の重要性

日本のデータを用いた研究で母子の価値観の伝達、類似性が認められる背景には、母子の接触時間の長さがあると考えられる。次ページ表 2 の「平成 23 年「社会生活基本調査」生活時間配分の 6 カ国比較調査」によると、末子が 6 歳未満の子を持つ日本人の母親は、1 日の家事と家族のケアに 7.02 時間 (6 カ国平均は 5.90 時間) を使っているが、夫は 1.16 時間 (6 カ国平均は 2.55 時間) に過ぎない。妻の家事労働、家族のケアの時間は一番長く、夫が一番短く、平均からの差を足すと 2.41 時間の差がある。

本比較調査は、幼児期のものだけではあるが、毎日の生活時間での 3 時間近い差の蓄積は大きい。つまり、日本の場合では、母子のコミュニケーション頻度、時間の長さによる母親の価値観の伝承の度合いは、他の国々よりも強いと推測することでき、反対に父親との接触が少ないことから父の価値観の伝承の度合いが弱いと仮定すると、子どもは母親からの影響をより強く受けるものと考えられる。したがって、日本における子どもの生育環境、ソーシャル・キャピタルの中での親子の相互関係や子どもへの親の関与などは、他の国々に比べて、母親に拠るところが大きい。(表 2)



表2 男性（夫）と女性（妻）の生活時間の国際比較

	項目	日本	アメリカ	ドイツ	フランス	スウェーデン	イギリス	6ヶ国平均
男性	個人的なケア	10.42	10.09	10.18	11.28	9.57	10.00	10.26
	家事と家族のケア	1.16	3.16	3.00	2.30	3.21	2.46	2.55
	仕事と仕事中の移動	7.57	5.20	4.32	4.55	4.53	5.33	5.25
	自由時間	2.36	4.44	4.39	3.53	4.09	3.58	3.73
女性	個人的なケア	11.08	10.34	10.51	11.39	10.30	10.20	10.64
	家事と家族のケア	7.02	5.37	6.11	5.49	5.29	6.09	5.90
	仕事と仕事中の移動	1.49	2.58	1.12	2.13	2.17	2.00	1.92
	自由時間	2.40	4.17	4.18	3.13	3.59	3.44	3.49

出所：平成 23 年「社会生活基本調査」生活時間配分の 6 カ国比較調査 (2001) (単位：時間)  
より抜粋

## 2.5 日本の女性の自尊心

日本の女性の置かれている厳しい状況は第 1 章で述べた。日本におけるジェンダー・ギャップの特徴は、初等教育の質や中等教育への進学率では世界トップクラスの男女平等が確保された状態であるのに、学校教育を終え、社会人になってから以降の、男女間の賃金格差、政治参加のギャップが大きいこと、全体としてのランキングが低いことである。そのような社会状況の中で豊田他 (2004) や大畠他 (2009) は、大学生までの自尊心は男女間での差はあまりなく、社会人となった以降に、女性の自尊心が男性よりも低くなっていくことを示している。これは、女性にとって厳しい社会環境を成人するまでは意識する機会が少なく、社会に出てから急に意識するようになり、自尊心が低下するのではないかと推測できる。本稿の主題である母親たちは社会に出て一定の時間が経過した後の女性たちであり、本稿での課題とした自尊心の低さもそのような社会環境の影響を受けている可能性がある。

以上のような先行研究を踏まえ、次章より本研究で小学生の子どもを持つ母親の自尊心を象徴する「自分の生き方への自信」の規定要因を明らかにする。

## 3 データの概要と基礎集計

本章以降では、課題意識に対する研究へのアプローチとして、母親の調査データの統計的な分析による「自信」の構成要因分析を行う。

### 3.1 データの概要

本稿で用いるデータは、2000年10月から11月に小学生の親子関係をテーマに行われた、ベネッセ教育総合研究所による「モノグラフ小学生ナウ 小学生の親子関係－母親調査から－、2000」（以降「原調査」と呼ぶ）である。調査対象は、東京・神奈川・千葉・埼玉・群馬の小学校5・6年生の保護者で、学校通しの質問紙調査として行われた。有効回収は1,712名、その内訳は母親1,620名（94.6%）、父親85名（5.0%）、その他7名（0.4%）である。母親サンプルだけを抽出し、さらにQ14「今の自分の生き方にどのくらい自信があるか」へ有効回答が確認できた1,590件のサンプルをまず概観する。子どもの性別は男子50.7%、女子49.3%、就業状況は専業主婦36.99%、フルタイム15.0%と標準的なサンプルであり、学校通しの質問票回収という手法からも回収率は高かったと考える。

原調査は、本稿執筆時において15年前、今は20代半ばである若者世代の親に当たる世代が、その若者たちが小学生の高学年時に行われた。実査から年数が経過した調査ではあるが、現在も母親世代、子どもたちの自尊心に対する課題は変わらない。そのため、時代を超えて、価値を持つと考えて対象に選んだ<sup>6)</sup>。

本稿の原調査分析における限界は、標本抽出が学校経由の有意抽出であり、母集団は県名のみ公開されており、データの代表性が担保されていないという点である。

### 3.2 基礎集計表の概要

母親の自己意識に関して、特徴のある結果をいくつか紹介する。今回着目するのは母親自身の「自分の生き方に対する自信」であるので、基礎集計を「自信」と関連する項目の比較で概観する。原調査は「自信」と「幸福」については「1とても、2わりと、3少し、4あまり、5まったく」の5段階で評価しているが、満足については、「1とても、2わりと、3あまり、4まったく」と中段階の「少し」が抜けた4段階である。

はじめに「自信」と「幸福」に関する設問に着目する。原調査に「自分は幸せか」という問いはなかったので、「子どもがいて幸せか」という問いを用いる。図3に示したように、「幸福」の問いには79.3%（8割近く）が5段階の最大値

---

に当たる「とても幸せ」を選択し、また、1,590人の母親の誰一人として「全く幸せでない」とは答えておらず、「とても」と「わりと」の総計が98%を占める。それに対し、「自信」の問いには、わずか3.7%しか「とても自信がある」と答えていない。つまり、8割近くの母親が「とても幸せ」なのに、わずか4%の母親しか「とても自信がある」状態ではない。次に「満足」に対して図4にて同様の観点で概観する。原調査では「今の自分の生き方への満足」について聞いた問いには、先ほどの「自信」、「幸福」とは違い、「妻として」「母として」「友人関係」「趣味や余暇の時間」の4つのテーマについてそれぞれ4段階の選択肢である。次ページの図4に示したように、いずれの項目も「1とても」ではなく「2わりと」に最も多くの回答があることが特徴的である。

以上の結果より、「とても幸せ」で「わりと満足」し、「少し自信がある」母親がボリュームゾーンである。ただし、「趣味や余暇の時間」に関する満足については、「2わりと」と「3あまり」が拮抗した状況であり、あまり満足度が高いとはいえない。

### 3.3 二次分析に向けて

ボリュームゾーンとして、「幸せ：とても」、「満足：わりと」、「自信：少し」という構図は見えたが、それでは「自身の生き方への自信」を持つという状態を

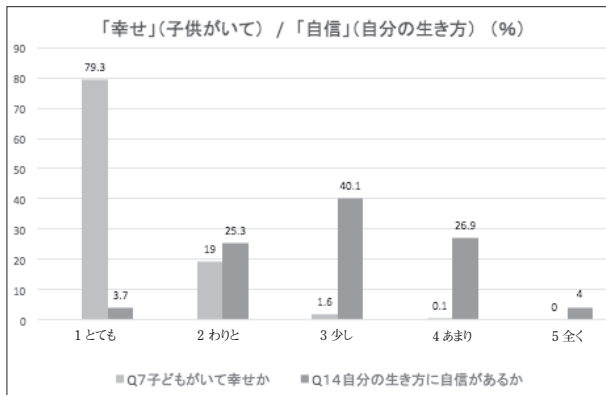


図3 「幸福」「自信」の素データの分布  
出所：原調査報告書より抜粋

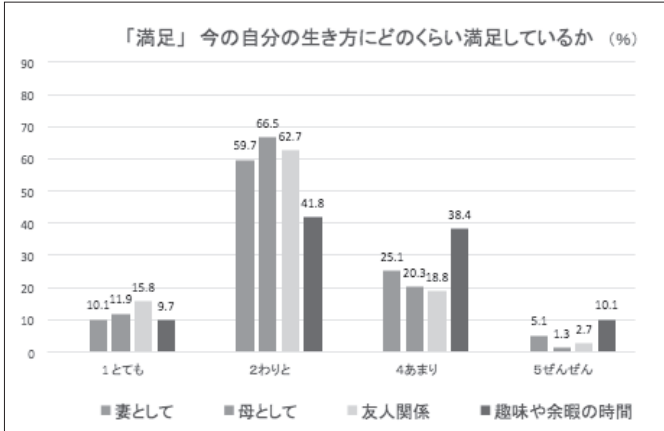


図4 満足度の素データの分布  
出所：原調査報告書より抜粋

実現するには、何が寄与するのだろうか。

本稿では、「自信」を分析するにあたり、原調査データより、1) 将来、2) 現在、3) 過去の3つの時間軸における役割に関する設問に着目し、二次分析に使用する変数を抽出する。

まず1) 将来に着目した理由を述べる。小学校高学年の母という属性は、育児に費やされていた時間が急激に減って、子どもから手が離れていき、母親が自分自身と向き合う余裕が出てくる特徴的な時期である。

図5にまとめたように、末子が就学前は母親の育児に費やす時間は1日あたり3.25時間、小学生だと30分である(総務省, 2012)。本調査対象の母親は、二人以上の子を持つ母が8割超であり、育児に使っていた時間が急激に減っている過渡期にある。日本の女性の育児のための離職率の高さ、育児家事に費やす時間の多さから考えて、1日の中での時間の使い方が変わり、これまでの数年間と違う人生が展望できはじめる時期である。さらに、原調査より、図6にまとめたように、子どもの存在意義に関し、現在は「生きていく支え」のように思っているながら、将来については子どもに頼らない(頼りたくない)展望をもっていることを確認できる。

そこで、現在だけでなく、将来の展望が重要な要因であると仮定し、1) 将来

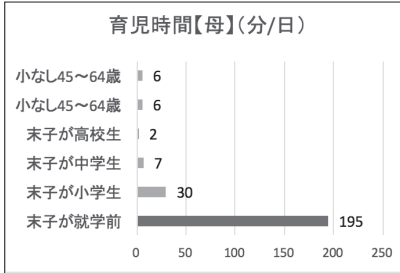


図5 母親が育児に使う時間

出所：平成23年社会生活基本調査(総務省)

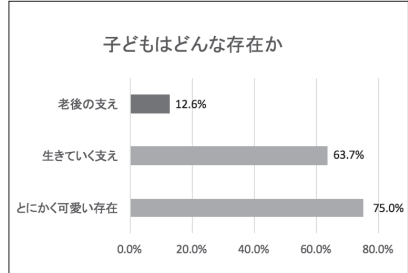


図6 子どもの存在意義

出所：原調査報告書より筆者抜粋

の生きがいに関連する項目を選択する。次いで2) 現在の分析である。まず家庭内の大きな役割である「母」「妻」を、家庭外の代表としての「友人関係」の3つの役割別満足度分析要因として採用する。最後に3) 過去についても着眼できないか検討する。原調査には、過去に関する設問が多くなかったが、過去数年間で母親として過ごしてきた集積として3) 子どもの成長に対する満足度を取り上げる。

以上、将来に関する項目から2変数、現在に関する項目から3変数、過去に関する項目から1変数を分析で使用する。

## 4 分析

### 4.1 分析の目的

分析の目的は母親の「自分の生き方への自信」の規定要因がどのようなものであるかを明らかにすることである。特に現在の満足度、将来の展望、過去への満足度が自信に与える影響に着目して分析を行っていく。また、その影響が家庭の経済状況や母親の学歴や就業形態といった属性によって違いが出るかを考察していく。なお、本2次分析では、目的変数となるQ14「今の自分の生き方」と6つの説明変数、3属性変数すべての有効回答が確認できた1,428件のサンプルを使用する。

### 4.2 使用する変数

「自信」の有無の被説明変数  $y$  として「自分の生き方にどのくらい自信があ

りますか」という問いを用いる。これは順序性を持ったデータであり「自信の強度」の5段階評価である。結果の見やすさのために、原調査では、「とても自信がある」が1であったが、順序を反対にして、「ぜんぜん自信がない」を1、「あまり自信がない」を2、「少し自信がある」を3、「わりと自信がある」を4、「とても自信がある」を5とした。記述統計量は表3にまとめる。

属性変数は「暮らし向き」「母学歴」「母就労状況」の社会経済的なステータスを代表する3項目を採用する。表4にまとめるが、属性変数については、2値変換したモデルをまず考える。理由は、就業状況に対しては、原調査において、「フルタイム」就業は自信にポジティブな効果があるが、その他の就労形態はむしろネガティブな効果があることがわかっている。また自営業、パートタイムも、自発的、非自発的な理由における様々な賃金、自由度を含む就業の様式を含む選択肢であり、拘束時間の長さや収入など就業のアウトカムも含めた段階性は明瞭ではない。そこで就業の長さの段階で変数を作らず、フルタイムのみ1、他を0とした2値で処理をした。

その上で就業形態に段階性を持たせるモデルもモデル3として合わせて検討する。それぞれの $z$ の変数と2値の変換は、原調査から自信に対する分化を考慮して、「暮らし向き」は「とても豊か」を4とし、「あまり豊かでない」を1とした上で、 $z$ 1暮らし向き変数とし、さらに「とても豊か」と「まあ豊か」を

表3 記述統計量

変数名	変数の内容	観測数(N)	標本平均	標準誤差	最小値	最大値
y	自分の生き方に自信があるか	1428	3.000	0.900	1	5
x1	将来展望：趣味が豊かな満ち足りた生活	1428	2.898	0.660	1	4
x2	将来展望：気の合った友だちがたくさん	1428	2.898	0.640	1	4
x3	現在：生き方満足度：母親として	1428	2.898	0.600	1	4
x4	現在：生き方満足度：妻として	1428	2.750	0.700	1	4
x5	現在：生き方満足度：自分の友人関係	1428	2.917	0.670	1	4
x6	過去蓄積：子どもの成長に対する満足度	1428	2.700	0.630	1	4
z1	暮らし向き	1428	2.190	0.650	1	4
z2	最終学歴	1428	3.112	1.320	1	5
z3	就業状況	1428	2.957	1.140	1	4

表 4 属性変数の作成と 2 値への変換

原	暮らし向き	割合 (%)	z1	z10 (2 値)
4	とても豊か	2.2	4	1
3	まあ豊か	25.4	3	1
2	普通	59.4	2	0
1	あまり豊かでない	13.0	1	0

原	学歴	割合 (%)	z2	z20 (2 値)
1	中学校	3.6	1	0
2	高校	41.2	2	0
3	専門専修学校	16.0	3	0
4	短大	20.9	4	1
5	大学	17.5	5	1
6	大学院	0.5	5	1
7	その他	0.3	1	0

原	z3 就労	割合 (%)	z3	z30 (2 値)
1	専業主婦	36.9	1	0
2	パートタイム	33.6	2	0
3	フルタイム	15.0	4	1
4	自営業	8.2	3	0
5	在宅ワーク	3.6	3	0

1とし、それ以外を0とした2値の変数 z10 を作成した。同様に「学歴」は教育の長さを基準に5段階にした z2、かつ短大卒以上を1とし、高卒以下を0とした2値の変数を z20 とした。就業状況は、就業による賃金の多さ、自由度、などを総合的に考え、フルタイムを4とし、自由業と在宅ワークを3、パートタイムを2、主婦を1とする z3 を作成した。その上でフルタイムのみを1、他を0とした2値の変数を z30 とした。

#### 4.3 分析手法

被説明変数  $y$  は、「自信の強さ」で、順序はあり離散的な値をとる。そこで、潜在変数モデルを仮定し、順序ロジット分析を行う。潜在変数モデルは説明変数を  $x = (x_1, \dots, x_6)'$  で表し、 $y$  の潜在変数を  $y^*$  として、

$$y = x' \beta + e$$

と記述できる。ここで  $\beta$  はパラメータであり、 $x$  が与えられたときの  $e$  はロジスティック分布の分布関数である。この潜在変数  $y^*$  は自信の度合いを表すものである。そして、潜在変数の値がある一定以上の値をとるとアンケートの回答が変わる。つまり、潜在変数  $y^*$  は観測することはできず、 $y$  の値のみ観測可能である。

$$y = \begin{cases} 1, & y^* < \gamma_{1|2} \text{ のとき} \\ 2, & \gamma_{1|2} < y^* < \gamma_{2|3} \text{ のとき} \\ 3, & \gamma_{2|3} < y^* < \gamma_{3|4} \text{ のとき} \\ 4, & \gamma_{3|4} < y^* < \gamma_{4|5} \text{ のとき} \\ 5, & \gamma_{4|5} < y^* \text{ のとき} \end{cases}$$

ここで  $\gamma = (\gamma_{1|2} \dots \gamma_{4|5})'$  である。推定すべきパラメータは  $\beta$  と  $\gamma$  である。

推定に当たっては、まずモデルを2つ設定する。1つ目は、 $x$  の説明変数にのみ着目したモデルである。まずこのモデル1で概況を見た上で、属性変数をいれたモデルをモデル2として設定する。その上で、属性変数をできるだけ段階的にしたモデル3も検討する。

#### 4.4 分析結果

まず、表5のモデル1の結果について述べる。すべての説明変数が高い効果推定値を持っている。特に  $x1$  の「将来の趣味豊かな生活への展望」の推定値が0.834と最も高く、次いで、 $x3$  の現在の「母親としての満足度」が0.710、 $x5$  の「現在の自分の友人関係に対する満足度」が0.661である。これらは、他の説明変数の約2倍の効果を持っている。

続いて、モデル2の結果である。すべての変数が高い効果推定値を持つことは変わらない。属性変数にも効果がある。6つの説明変数に着目すると、前述の3つの変数が他より大きな効果を持っていることも、その効果の大きさの順番も変わらない。 $x1$  「将来の趣味豊かな生活展望」の推定値0.755と  $x3$  の現在の「母親としての満足度」が0.731と差が少し縮まる傾向は見られる。

最後にモデル3の結果である。 $x1$  の「将来の趣味豊かな生活への展望」の



表5 モデル1、モデル2、モデル3結果

順序ロジット分析		model 1xのみ			model 2 2値にした属性加味			model 3 段階的な属性加味		
	説明変数	効果 推定値	標準 誤差	有意 水準	効果 推定値	標準 誤差	有意 水準	効果 推定値	標準 誤差	有意 水準
x1	将来展望：趣味が豊かな満ち足りた生活	0.834	0.097	***	0.755	0.099	***	0.741	0.100	***
x2	将来展望：気の合った友だちがたくさん	0.360	0.104	***	0.403	0.104	***	0.415	0.105	***
x3	現在：生き方満足度：母親として	0.710	0.114	***	0.731	0.114	***	0.732	0.114	***
x4	現在：生き方満足度：妻として	0.418	0.090	***	0.442	0.091	***	0.449	0.092	***
x5	現在：生き方満足度：自分の友人関係	0.661	0.095	***	0.650	0.095	***	0.633	0.095	***
x6	過去蓄積：子どもの成長に対する満足度	0.397	0.089	***	0.366	0.090	***	0.350	0.090	***
	暮らし向き			z10	0.227	0.117	*	z1	0.139	0.085
	最終学歴			z20	0.308	0.106	***	z2	0.147	0.043
	就業状況			z30	0.575	0.150	***	z3	0.237	0.050

\*\*\*有意水準0.1% \*\*有意水準1% \*有意水準5%

model 1			
閾値	推定値	標準誤差	
1   2	5.349	0.400	
2   3	8.484	0.427	
3   4	10.783	0.460	
4   5	13.629	0.513	

model 2			
閾値	推定値	標準誤差	
1   2	5.513	0.406	
2   3	8.687	0.435	
3   4	11.026	0.470	
4   5	13.892	0.521	

model 3			
閾値	推定値	標準誤差	
1   2	5.947	0.424	
2   3	9.128	0.453	
3   4	11.470	0.488	
4   5	14.328	0.539	

推定値が0.741と最も高く、次いで、x3の現在の「母親としての満足度」が0.732、x5の「現在の自分の友人関係に対する満足度」が0.633とモデル2と比較すると多少、x1、x3の差が縮まったものの効果の大きさの順番に変動はない。

属性変数を加える前後、また処理の仕方によってもこれらの3つの説明変数の推定量が大きく、効果の大きさの順番も同じ結果であったので、3つの変数、特にx1「将来の趣味豊かな生活への展望」が自信に寄与するといえることがわかった。

次いで、本モデルは満足度という心理的尺度に関して、見通しが明るいか否か、満足しているか否かを二元論的に考えたモデルも検討した。採用した説明変数が、原調査においてどれも「とても満足」「まあ満足」「あまり満足していない」「まったく満足していない」の4段階であったことから「満足」に対し

て肯定か否定かの態度に着目し、「とても」と「まあ」を肯定的とし1、「あまり」「まったく」を否定的とし0と捉えた2値で検証した。モデル1に対する2値のモデルとしてのモデル4、モデル2に対する2値のモデル5を設定した結果を表6にまとめる。モデル4においては、2値で分析した時も、x10「将来の趣味豊かな生活展望」が1.014と最も高く、x30「現在の母親としての満足度」とx50「現在の友人関係の満足度」の3つの説明位変数が、他の2倍近い高い寄与度があることは変わらない。しかし、効果が高い順に並べた場合の順番は変わり、x10「将来の趣味豊かな生活展望」の次にx50「現在の友人関係の満足度」が位置する。また、属性変数を加えたモデル5ではx50「現在の友人関係の満足度」の効果推定値が最も大きくなる。「ある」「なし」の二元論で考えた場合は、x50「現在の友人関係の満足度」の寄与度が他と比較した時に高くなる。

表6 説明変数を2値にしたモデル4、モデル5

順序ロジット分析		model 4 xのみ 2値			model 5 2値かつ属性変数加味		
	説明変数	効果推定値	標準誤差	有意水準	効果推定値	標準誤差	有意水準
x10	将来展望：趣味が豊かな満ち足りた生活	1.014	0.128	***	0.896	0.130	***
x20	将来展望：気の合った友だちがたくさん	0.505	0.141	***	0.568	0.142	***
x30	現在：生き方満足度：母親として	0.871	0.158	***	0.884	0.158	***
x40	現在：生き方満足度：妻として	0.554	0.134	***	0.568	0.134	***
x50	現在：生き方満足度：自分の友人関係	0.951	0.142	***	0.922	0.142	***
x60	過去蓄積：子どもの成長に対する満足度	0.557	0.111	***	0.516	0.112	***
z10	暮らし向き				0.373	0.115	***
z20	最終学歴				0.341	0.104	***
z30	就業状況				0.440	0.148	***

\*\*\*有意水準0.1% \*\*有意水準1% \*有意水準5%

model 4			
閾値	推定値	標準誤差	
1   2	-0.780	0.180	
2   3	2.282	0.172	
3   4	4.469	0.200	
4   5	6.996	0.244	

model 5			
閾値	推定値	標準誤差	
1   2	-0.542	0.186	
2   3	2.551	0.181	
3   4	4.777	0.211	
4   5	7.339	0.255	

その他、モデル1から5を通じ特徴的な結果を記述する。友人関係については、x2、x20の将来展望としては強く出ないのにもかかわらず、x5、x50「現在の友人関係の満足度」の効果推定値が高いことが興味深い。また、現在に着目した場合、多くの時間を過ごしているx30「現在の母親としての満足度」が自信に寄与することは予想通りであったが、同様に多くの時間を過ごしている家族としてのx40「妻として」よりもx50の「友人関係」の方が強く、全てのモデルを通じ、1.5倍から2倍の効果がある。これまで多くの時間と労力を費やしたであろうx60の過去蓄積としての「子どもの成長に対する満足度」も、上述の3つの説明変数に比べ寄与度が低い。また今回設定したその他の変数も全て有意性が確認される。改めて「自信」の構成要素の複層性が確認できる。

#### 4.5 結果考察

分析の目的は母親の「自分の生き方への自信」の規定要因がどのようなものであるかを明らかにすることであった。6つの説明変数の中で、家庭内の役割としてのx3「母親としての満足度」の寄与が高かったのは予想通りであったが、x1「将来の趣味豊かな生活」とx5「現在の友人関係の満足度」の二つの説明変数がそれと同等、条件によってはそれの以上の効果を持っていたということが本分析で明らかになった。

モデル1から5のうち4つのモデルにおいて、推定値の大きさが最も高かったのが「将来の趣味豊かな生活」の寄与度である。現在、過去、将来の時間軸において、将来に対する展望が強く出てきたことが興味深い。第3章図6でも示したように、小学生の子どもを持つ母親は、母親としての役割を中心に生活を送りながらも、将来は子どもからの自立を望み、子どもに依存したくないという願いを強く持っている。第2章の表2にまとめた「平成23年社会生活基本調査」によると、日本人の母親は、1日の平均自由時間は2.40時間、うちテレビの視聴時間が1.26時間である。比較対象国の中で最も自由時間が少なく、第3章図4の満足度基礎集計からも、現在の趣味や余暇に関する満足度は決して高くはない。そのような母たちが「自信」を持つためには、現在満たされていない趣味や余暇を楽しみ、将来に続く「母親」や「妻」という役割を超えた、生きがいに対する明るい展望が必要なようである。

同様に  $x_5$  「現在の友人関係の満足度」の寄与度の高さも注目に値する。モデル 4、モデル 5 に示したように、二元論的に心の状態に着目した際には、属性変数を加味した時には最も  $x_{50}$  の「現在の友人関係の満足度」の効果が大きかった。日本の母親の自由時間の少なさは前述通りで、友人と過ごすことに割ける時間も少ないだろう。2000 年の実査時には、携帯電話の普及率は 50% 以下で、現在のようなソーシャルメディアもなく、家事をしながら友人とチャットするなどの環境も一般的ではない。そのような状況にありながら、家庭内の役割である妻としての満足度以上に現在の友人関係の満足度が寄与するのはなぜだろうか。低い就労率も合わせ、潜在的に満たされてない社会的活動の象徴なのか、または「友人関係」に力を注げるだけの（育児負担や価値観も含めた）生活の自由なのだろうか。いわゆる「ママ友」の重要性を示す結果であり、ソーシャルメディアの発達した現在において「友人関係」の効果はどう変化するのか。友人関係については、現在の効果の方が将来展望としての効果より大きいという興味深い結果も合わせ、母親の自信形成における友人関係の果たす役割を考えていきたい。

以上、本分析の考察をまとめると、母親の「自信」を考える上で、「母親としての満足度」や家庭内での満足度だけにとどまらず、社会性や将来展望など複層的な要因を考慮する必要があり、特に「将来への生きがいへの展望」や「現在の友人関係（社会性）」が重要なキーワードである。国際的な比較調査において、日本の母親が置かれている状況の厳しさから、現在満たされていない社会性を担保できる時間的な余裕や余暇の充実が母親の自信に寄与するであろうことが明らかになった。

## 5 生き方への「自信」の統計分析の結果の解釈

### 5.1 解釈の指標

本稿で用いたモデルの、影響の大きさを解釈するために次の指標を用いる。この指標は推定したモデルに基づく条件付き確率の差で定義される。これは説明変数が 4 値と、取り得る値が限られているためである。つまり、 $x_j$  の影響の大きさに関心があるとす。ここで、 $x_j$  は、1 から 4 の整数の値をとり得るので、 $x_j = k + 1$  を用いて導出した当てはめ値から  $x_j = k$  を用いて導出し

た当てはめ値を引いた値を用いる。ここで  $k$  は 1 から 3 の整数である。また、 $i \neq j$  の変数に関しては、その値の標本平均  $\bar{x}_i$  によって計算されている。これは下記の式で表される。

$$\widehat{P.r}(x_j = k+1, x_{i \neq j} = \bar{x}_j) - \widehat{P.r}(x_j = k, x_{i \neq j} = \bar{x}_j)$$

この指標によって、効果の大きさを計算し、より直感的に解釈していく。z に関しても同様に解釈する。

## 5.2 考察

6つの説明変数に対する、確率と確率の差をまとめた分析の結果が次ページの表7である。左側には各段階における出現割合をパーセント表記し、右側に説明変数の段階の変化の差をまとめる。「1まったく」(強い否定)から「2あまり」(弱い否定)に変化した時の差を2-1、「2あまり」から「3わりと」(弱い肯定)に変化した時の差を3-2、「3わりと」から「4とても」(強い肯定)に変化した時の差を4-3のように表す。

効果推定値が大きかった x10 の「将来の趣味豊かな生活への展望」、x30 の現在の「母親としての満足度」、x50 の「現在の自分の友人関係に対する満足度」の要因について中心に結果を考察する。

まず、3要因とも、安定的に、どの段階においても満足していない否定的な状態から、肯定的な状態に移行することで、自信に対するポジティブなインパクトがあることが確認できる。また自信の5段階においては、2段階目「あまり自信がない」場合の影響が最も大きく、次いで、4段階目における「わりと自信がある」場合である。「5とても」または「1ぜんぜん」という「自信」へのステータスがある意味ははっきりしている層と、「3少し」と答えている中間層における効果は少ない。

説明変数である x1 「将来の趣味豊かな生活への展望」や x3 「母親としての満足」、x5 「現在の友人関係の満足度」「趣味豊かな将来への展望」や「母親としての満足」「友人関係への満足」を高めた場合、ポジティブの効果が最も起こりうるのは、自信に対し、肯定、否定の何らかの意識はもっているものの

表 7 自信の各段階における各説明変数の影響（「自信がある」と回答する人の率の差）

y = 自分の生き方に自信があるか x1= 将来展望：趣味豊かな満ち足りた生活					出現確率の差			絶対値 での差 の平均	
	出現確率	1 まったく	2 あまり	3 わりと	4 とても	2-1	3-2		4-3
1	ぜんぜん 自信がない	6.1%	2.7%	1.2%	0.5%	-0.033	-0.015	-0.007	0.018
2	あまり自信 がない	53.7%	36.5%	20.7%	10.3%	-0.172	-0.158	-0.104	0.145
3	少し自信が ある	33.9%	47.3%	51.7%	43.9%	0.134	0.044	-0.078	0.085
4	わりと自信 がある	5.9%	12.6%	24.3%	40.6%	0.066	0.118	0.163	0.116
5	とても自信 がある	0.4%	0.9%	2.0%	4.6%	0.005	0.011	0.025	0.014

y = 自分の生き方に自信があるか x2= 将来展望：気の合った友だちがたくさん					出現確率の差			絶対値 での差 の平均	
	出現確率	1 まったく	2 あまり	3 わりと	4 とても	2-1	3-2		4-3
1	ぜんぜん 自信がない	2.8%	2.0%	1.4%	1.0%	-0.008	-0.006	-0.004	0.006
2	あまり自信 がない	36.8%	29.4%	22.8%	17.2%	-0.074	-0.066	-0.056	0.065
3	少し自信が ある	47.1%	50.6%	51.9%	50.7%	0.035	0.013	-0.012	0.020
4	わりと自信 がある	12.4%	16.7%	22.1%	28.5%	0.043	0.054	0.064	0.054
5	とても自信 がある	0.9%	1.3%	1.8%	2.6%	0.004	0.005	0.008	0.006

y = 自分の生き方に自信があるか x3= 現在：生き方の満足度：母親として					出現確率の差			絶対値 での差 の平均	
	出現確率	1 まったく	2 あまり	3 わりと	4 とても	2-1	3-2		4-3
1	ぜんぜん 自信がない	5.3%	2.7%	1.3%	0.7%	-0.026	-0.013	-0.007	0.015
2	あまり自信 がない	50.8%	35.9%	22.2%	12.5%	-0.149	-0.136	-0.097	0.128
3	少し自信が ある	36.7%	47.7%	51.9%	47.0%	0.110	0.042	-0.049	0.067
4	わりと自信 がある	6.8%	12.9%	22.7%	36.2%	0.060	0.098	0.134	0.098
5	とても自信 がある	0.5%	0.9%	1.9%	3.7%	0.005	0.009	0.019	0.011

y = 自分の生き方に自信があるか x4= 現在: 生き方の満足度: 妻として					出現確率の差			絶対値 での差 の平均	
	出現確率	1 まったく	2 あまり	3 わりと	4 とても	2-1	3-2		4-3
1	ぜんぜん 自信がない	2.9%	1.9%	1.3%	0.8%	-0.010	-0.007	-0.004	0.007
2	あまり自信 がない	37.9%	29.3%	21.7%	15.6%	-0.066	-0.076	-0.061	0.074
3	少し自信が ある	46.5%	50.7%	51.8%	49.8%	0.042	0.012	-0.021	0.025
4	わりと自信 がある	11.9%	16.9%	23.3%	30.9%	0.050	0.064	0.077	0.064
5	とても自信 がある	0.8%	1.3%	1.9%	2.9%	0.004	0.006	0.010	0.007

y = 自分の生き方に自信があるか x5= 現在: 生き方の満足度: 自分の友人関係					出現確率の差			絶対値 での差 の平均	
	出現確率	1 まったく	2 あまり	3 わりと	4 とても	2-1	3-2		4-3
1	ぜんぜん 自信がない	4.9%	2.6%	1.3%	0.7%	-0.023	-0.012	-0.006	0.014
2	あまり自信 がない	49.2%	35.2%	22.5%	13.2%	-0.140	-0.127	-0.093	0.120
3	少し自信が ある	38.1%	48.0%	51.9%	47.8%	0.099	0.038	-0.041	0.060
4	わりと自信 がある	7.4%	13.2%	22.4%	34.8%	0.059	0.092	0.124	0.091
5	とても自信 がある	0.5%	1.0%	1.6%	3.5%	0.005	0.009	0.017	0.010

y = 自分の生き方に自信があるか x6= 過去蓄積: 子どもの成長に対する満足度					出現確率の差			絶対値 での差 の平均	
	出現確率	1 まったく	2 あまり	3 わりと	4 とても	2-1	3-2		4-3
1	ぜんぜん 自信がない	2.7%	1.9%	1.3%	0.9%	-0.009	-0.006	-0.004	0.006
2	あまり自信 がない	36.6%	28.5%	21.4%	15.6%	-0.061	-0.071	-0.058	0.070
3	少し自信が ある	47.2%	50.9%	51.8%	49.8%	0.037	0.009	-0.020	0.022
4	わりと自信 がある	12.5%	17.4%	23.5%	30.8%	0.049	0.062	0.073	0.061
5	とても自信 がある	0.9%	1.3%	1.9%	2.9%	0.004	0.006	0.009	0.007

確信に至ってない層である。これは、効果が高かった3要因でほぼ同じ傾向であった。

さらに x1 「将来の趣味豊かな生活への展望」に着目すると最も効果が大きいのは、「2 あまり」自信がない層において、将来の趣味豊かな生活の展望がなかった層が少しでも展望を持った場合である。ついで「4 わりと」自信がある層が将来展望をよりよく持った時の効果量が大きい。

### 5.3 自信段階別の影響の解釈—属性変数

属性変数に対しても確率の差の検証を行う。結果は表8の通りである。

y = 自信の段階別の分析であるが、z03 就業形態は、自信の5段階においては、4段階目の「わりと自信がある」場合の影響が最も大きく、次いで、「5 とても」

表8 属性別の影響の確率の差の検証

y = 自分の生き方に自信があるか z01 = 豊かさ

	出現確率	あまり・普通	とても・まあ	確率の差
1	ぜんぜん自信がない	1.4%	1.1%	-0.3%
2	あまり自信がない	24.3%	20.5%	-3.8%
3	少し自信がある	52.5%	52.5%	0.0%
4	わりと自信がある	20.2%	23.9%	3.7%
5	とても自信がある	1.6%	2.0%	0.4%

y = 自分の生き方に自信があるか z02 = 学歴

	出現確率	高卒以下	短大卒以上	確率の差
1	ぜんぜん自信がない	1.6%	1.2%	-0.4%
2	あまり自信がない	26.2%	20.9%	-5.3%
3	少し自信がある	52.2%	52.5%	0.4%
4	わりと自信がある	18.6%	23.5%	4.9%
5	とても自信がある	1.4%	1.9%	0.5%

y = 自分の生き方に自信があるか z03 = 就業形態

	出現確率	フルタイム以外	フルタイム就業	確率の差
1	ぜんぜん自信がない	1.4%	0.8%	-0.6%
2	あまり自信がない	24.5%	15.7%	-8.9%
3	少し自信がある	52.5%	50.7%	-1.8%
4	わりと自信がある	20.0%	30.1%	10.1%
5	とても自信がある	1.5%	2.7%	1.2%



または「1 ぜんぜん」という「自信」へのステータスがある意味はっきりしている層と、「3 少し」と答えている中間層における効果は少ない。また、「あまり」というどちらかといえばネガティブな自信の状態に対する効果も高いが、説明変数ほど「わりと」との差は大きくない。前述した通り、説明変数である将来展望や友人関係の満足度は「あまり」というどちらかといえばネガティブな層が最も効果が高かったことを合わせて考えると、将来展望や現在の友人関係に満足できるような施策を講じることは、属性的には不利な状況における場合においてより効果が高いといえる。属性の種類別の分析では、特に、フルタイム就労でない層に対する、将来展望、友人関係の満足度や明るい将来展望、母親としての満足度を高めることの自信を持たせる正の効果が確認できる。

## 6 まとめ

### 6.1 結論

本稿後半では、母親の自分の生き方への自信の規定要因の分析と解釈を行った。解釈の結果、発見された母親の「自身の生き方への自信」に関連する項目をまとめる。

- (1) 「現在の友人関係の満足度」、「現在の母親としての満足度」、「将来の趣味豊かな生活展望」が生き方への自信の大きさに寄与することが明らかになった。母親の「自信」の構成要因は「母としての満足」単独ではなく、社会的なつながりや将来展望など複層的である。
- (2) 特に、「趣味豊かな将来に対する展望」が「自信」の基盤として重要である。現在や過去の蓄積だけではなく将来の生きがいに対する明るい展望が、暮し向き、学歴など、属性変数を加味した時にも強い効果を持つ。また「現在の友人関係の満足度」の効果の大きさからも、家庭内の「母」「妻」という役割にとどまらない社会的な活動への満足が自信に寄与することが見出せる。
- (3) 効果が高い構成要因別に、自信の各段階における効果の影響の大きさを検討すると、2段階目「あまり自信がない」と4段階目「割と自信がある」場合に影響が最も大きくなる。「自信」に関しては、強い否定や肯定には

至らないものの、ある程度の意識を持って、弱い肯定、弱い否定を感じている層に変化が現れやすい。

- (4) 属性別分析では、フルタイム就業以外の層に対する効果が最も大きく、次いで暮らし向き、学歴の順に効果が大きくなる。

## 6.2 政策的インプリケーション

子どもたちの「自尊心のなさ」への課題提起、第3章までにまとめた理論的枠組み、前段の「母親の自身の生き方への自信」分析の結論を総括し、政策に生かすためには、母親たち自身のソーシャル・キャピタルを豊かにする施策を通じ、母親が自分の生き方に自信を持ち、肯定的な自己認識を持てるような社会が、次世代が「自尊心」を持った子ども・若者となる育成基盤として求められる。

原調査は2000年当時のものであるが、現代も子を持つ母親たちを取り巻く厳しい環境は変わらない。近年変化した社会的環境としては、子育て世帯の世帯年収の低下との母親の有職率の増加、インターネット、ソーシャルメディアの発達がある。まず、子育て世代の平均所得は、原調査時の2000年には769万円、2014年は712万円と1割近く減少した。(国民生活基礎調査, 2001, 2015)。2015年には小学校高学年にあたる9-11歳の子を持つ母親の有職率は8割近くに上るが、フルタイムは2割、あとは非正規雇用である(国民生活基礎調査, 2015)。また男性の非正規雇用も増えている。母親の有職率の増加にもかかわらず、世帯の平均所得が減り、非正規雇用が増えている現状は、母親の自信に対して、ポジティブなインパクトがある属性変数であった、x1 豊かさ、x3 就業形態に対する負の影響が懸念される。

さらに、インターネットやソーシャルメディアの発達が、母親たちの「友人関係」を含む人間関係を変化させている可能性も考えられる。満たされなかった社会性が満たされ、より「現在の友人関係」に満足する方向性に働く場合もあるだろうし、コミュニケーション手段の多様化がかえって「現在の友人関係への満足度」を下げる方向に働く場合もあるだろう。

そのような社会環境の変化を考慮した中でも変わらず、本分析から見出された政策のインプリケーションとしては、特に、以下の3点に集約される。

(1) 母親への時間的サポート

国際比較から見て長い女性の育児家事従事時間を減らし、「母親」「妻」という家庭内の役割以外のことを行える時間を確保する政策。また子育て中の女性も一人の人間としての余暇や趣味を楽しんで良い、友人関係に時間を割いても良いという価値観の変化に向けた啓蒙も必要であろう。男性の育児家事従事時間を確保できるような恒常的長時間労働の是正も求められる。

(2) 母親への社会的サポート

子育てをしながらも、豊かな友人関係を楽しみ、趣味豊かな将来を展望できるような環境の整備。例えば、発見や出会いの機会、ロールモデルなどのコミュニティ、社会性への施策などの提言。また子育てを過度に母親のみに負担をさせず、他の家族や社会も共同で次世代育成を担うという啓蒙活動も必要であろう。

(3) 効果が高いと思われる層への積極的な働きかけ、支援

母親本人では変えにくい属性である、就労形態や暮らし向きなどの条件が不利な層への、友人関係や将来展望を高める取り組み、自分に自信があまりない層など、より不利な人々への支援。近年の厳しい経済状況を反映し、増えていると思われる自信形成が困難な層への重点的な支援。

これらは、現在も、女性の地位向上、保育、福祉、教育などの場で、それぞれの研究分野での知見と知恵のもと、個別に実践されていることと重なる。しかし、より包括的な観点で、次世代育成の基盤として、母親自身に対するソーシャル・キャピタルを増やす取り組み、肯定的な自己認識、自信を含む「自尊心」を育成する施策として位置付けを再考することを提案したい。

### 6.3 課題と展望

本稿では、前半部分で課題提起と、仮説としての母親の自己意識への着眼を理論的にまとめたが、子どもたちの「自尊心の低さ」が何故目立つのかの要因分析、その中でのソーシャル・キャピタル各項目の寄与度、特に母親の自己意識にフォーカスすべきか、より強い要因があるのかも含め、明らかなことはま

だ少ない。

また母親の自分の生き方への「自信」については、将来展望、現在の友人関係への満足度、母親としての満足度が、母親の自身の「自信」に相関関係があることは捉えられたが、因果関係までは特定できていない。

加えて、子どもの健全な育成基盤としての社会関係資本に関する調査分析は、日本ではまだ緒についたばかりである。母子間のデータをマッチングでき、属性データと連結させながら、子どもとその家庭のソーシャル・キャピタルの詳細分析が可能になるようなデータの収集、蓄積、研究目的での開示が望まれる。

特に、国際比較の上でも子ども・若者の「自尊心の低さ」、女性の地位の低さを示すジェンダー・ギャップ、母親の家事育児労働の長さなどは明確な課題として繰り返し提起されている。これらの課題を、それぞれ、性別による格差や保育など、各分野の個別の問題として捉えるだけではなく、母子間の自己意識の世代間連鎖の可能性が立証できれば、より広範な支援への可能性が広がる。つまり、母親への本人の満足度や自己意識に対する支援が、母親本人のSWBを向上させる為だけではなく、子どもの非認知能力向上への重要な教育政策として実施できる。恒常的に低い日本の子ども・若者の自尊心の改善に向けて、学際的にさらなる研究を進めていきたい。

## 謝辞

原調査「モノグラフ小学生ナウ 小学生の親子関係—母親調査から—, 2000」が教育学の深い知見に基づき、調査対象者の配慮が凝らされており、答えにくい質問項目へも、高い回答率を得ていることは特筆に価する。改めて、深谷昌志教授をはじめとする調査グループ・調査協力者の皆様、ベネッセ総合教育研究所へ感謝する。

本稿の執筆にあたっては、慶應義塾大学中室牧子准教授、和田達磨准教授、修士課程2年の小林凌雅さんに指導と助言を、2016年中室牧子研究会夏期カンファレンスにご出席の皆様から貴重なコメントと示唆をいただいた。本稿における誤りはすべて筆者の責任であるが、感謝の意を表したい。

.....  
[二次分析]に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから [「モノグラフ小学生ナウ 小学生の親子関係—母親調査から—, 2000」(ベネッセ教育総合研究所)] の個票データの提供を受けました。

The data for this secondary analysis, “**The relationship of elementary school children and mothers, Benesse Research Center,**” was provided by the Social Science Japan Data Archive, Center for Social Research and Data Archives, Institute of Social Science, The University of Tokyo.

注

- [1] 正式名称はPISAが、OECDによる国際的な生徒の学習到達度調査(Programme for International Student Assessment, PISA)で、TIMSSが国際数学・理科教育調査(Trends in International Mathematics and Science Study, TIMSS)である。
- [2] これに対し、東洋諸国における自尊心の低さは、社会が個人主義ではないことによる文化的な違いであるという論もある(Dienner, 2009)。
- [3] この指標は、男性を100とした時の女性の地位を教育、健康、政治、経済の4分野における平等性で数値化したものであり、他のすべてのG7加盟国が50位以内に入っている。日本は、教育や健康では平均に近いのにもかかわらず、100位以下であるのは、政治家の女性比率の低さ、管理職女性登用率の低さ、男女間の賃金格差など、政治、経済面での順位の高さ、つまり「母親世代」の女性の直面している状況によるところが大きい。
- [4] 同様の統計で、Better Life Index(OECD, 2013)でも日本のジェンダーギャップの大きさの指摘は変わらず、特に男女間の賃金格差、無償の家事労働時間の男女格差などが指摘されている。
- [5] 補足として、日本と同じく学力が高いのに、子ども、若者の自尊心の低さが課題になっている韓国も、本ランキングでは114位と女性の地位が低いことも付記しておく。
- [6] なお、一次分析及基礎集計票は以下に公開されている(<http://www.blog.crn.or.jp/search/0109.html>)。

参考文献

- 大島 みどり・沢崎 真史・久田 満「大学生におけるカウンセリングに対する態度とその関連要因：性差と自尊心に注目して」『コミュニティ心理学研究』12(2)、2009年、pp.129-140。
- 大山 七穂「親子関係と親の影響力」『第2回青少年の生活と意識に関する基本調査報告書』内閣府、2001年。<<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/seikatu2/html/html/4-2.html>> (2016年7月25日アクセス)
- 小川 和孝「母子間における価値観の伝達—性別役割分業意識に焦点を当てた分析—」『高校生の進路意識の形成とその母親の教育的態度との関連性 研究成果報告書』東京大学社会科学研究所、2014年。
- 厚生労働省「国民生活基礎調査」結果概況、2001/2015年。<<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/20-21kekka.html>> (2016年11月3日アクセス)
- 菅原 ますみ「養育者の精神的健康と子どものパーソナリティの発達：母親の抑うつに関して」『性格心理学研究』5(1)、1997年、pp.38-55。
- ベネッセ教育総合研究所「モノグラフ・小学生ナウ 調査データ」2008年。<<http://www.blog.crn.or.jp/search/01/09.html>> (2016年7月25日アクセス)
- 総務省「平成23年社会生活基本調査 詳細行動分類による生活時間に関する結果要約」2012年。<<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/houdou3.pdf>> (2016年7月25日アクセス)
- 戸田 淳仁・鶴光 太郎・久米 功一「幼少期の家庭環境、非認知能力が学歴、雇用形態、賃金に与える影響」『RIETI Discussion Paper Series』14-J-019、2014年。
- 豊田 加奈子・松本 恒之「大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』創刊号、2004年、pp.38-54。
- 内閣府「平成26年版子ども若者白書 特集1自己認識」2014年。<<http://www8.cao>

go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/tokushu\_02.html > (2016年7月25日アクセス)  
中澤 渉「進路意識の母子間における一致と齟齬」『高校生の進路意識の形成とその母親  
の教育的態度との関連性 研究成果報告書』東京大学社会科学研究所、2014年。

- Campbell, A., Converse, P. E., and Rodgers, W. L., *The quality of American life: Perceptions, evaluations, and satisfactions*, Russell Sage Foundation, New York, 1976.
- Coleman, J. S., “Social capital in the creation of human capital,” *American Journal of Sociology*, 1988, pp. S95-S120.
- Diener, E., and Diener, M., “Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem,” In *Culture and well-being*, Amsterdam: Springer, 2009, pp.71-91.
- Greenwald, A. G., and Banaji, M. R., “Implicit social cognition: attitudes, self-esteem, and stereotypes,” *Psychological Review*, 102(1), 1995, pp. 4-27
- Heckman, J. J., Stixrud, J., and Urzua, S., “The Effects of Cognitive and Noncognitive Abilities on Labor Market Outcomes and Social Behavior,” *Journal of Labor Economics*, 24(3), 2006, pp. 411-482.
- IEA “TIMSS 2011 International Results in Mathematics” 2011. <[http://timssandpirls.bc.edu/TIMSS2011/downloads/T11\\_IR\\_M\\_Chap.ter2.pdf](http://timssandpirls.bc.edu/TIMSS2011/downloads/T11_IR_M_Chap.ter2.pdf)> (2016年7月25日アクセス)
- Leary, M. R., and Baumeister, R. F., “The nature and function of self-esteem: Sociometer theory,” *Advances in Experimental Social Psychology*, 32, 2000, pp.1-62.
- Lee, S., and Ohtake, F., “The Effects of Personality Traits and Behavioral Characteristics on Schooling, Earnings, and Career Promotion,” *RIETI Discussion Paper*, 14-E-023, 2014.
- Mecca, A. M., Smelser, N. J., and Vasconcellos, J., *The Social Importance of Self-esteem*, CA: University of California Press, 1989.
- OECD “PISA 2009 results: overcoming social background: equity in learning opportunities and outcomes,” volume II, 2010. <<https://www.oecd.org/pisa/pisaproducts/48852584.pdf>> (2016年7月25日アクセス)
- OECD “PISA - Against the Odds: Disadvantaged Students Who Succeed in School,” 2011.<<http://www.oecd.org/pisa/pisaproducts/pisa-againsttheoddsdisadvantagedstudentswhosucceedinschool.htm>> (2016年7月25日アクセス)
- OECD “PISA2012 Key findings -Japan,” 2012. <<http://www.oecd.org/pisa/keyfindings/PISA-2012-results-japan.pdf>> (2016年7月25日アクセス)
- OECD “Better Life Index-Japan,” 2013. <<http://www.oecdbetterlifeindex.org/countries/japan/>> (2016年7月25日アクセス)
- World Economic Forum, “The Global Gender Gap. Report 2015- Japan Country Report,” 2015. <<http://reports.weforum.org/global-gender-gap-report-2015/economies/#economy=JPN>> (2016年7月25日アクセス)

{受付日 2016. 7. 22}  
{採録日 2016.11.25}